

## 『心はひとつ ～豆腐に込められたニッポンへの思い～』

第1回目のパラグアイ便り(『地球の裏側の日本』)の中で、パラグアイでの日本の存在感は日本では想像がつかないほど大きなものであり、当国での日本人社会の存在感も他国にも例を見ないものであることが紹介されていました。世界第4位というパラグアイの最大輸出産品である大豆を見ても、日本人移民が多大な苦労を経て入植予定地をゼロから開拓し、大豆の新たな栽培方法(不耕起栽培)を始め、これがパラグアイ全土に広まったことで国際市場への輸出の道が開けたのです。

これらのことを象徴する出来事として忘れることができないエピソードがあります。2011年3月に発生した東日本大震災の際に被災地に届けられた、パラグアイ産大豆で作られた豆腐にまつわるプロジェクトです。このプロジェクトは、パラグアイ三大日系移住地であるイグアス移住地(世界三大瀑布の一つであるイグアスの滝から車で1時間程度)の日系人が生産した非遺伝子組み換え大豆100トンを使用して豆腐100万丁を日本で生産し、これを被災地に届けたというものです。



未曾有の災害となった東日本大震災の後、パラグアイ日系人社会では、日本の被災地に向け、震災後の困難な生活を余儀なくされている方々の健康や被災地の一刻も早い復興を願い、何か支援を行いたいとの思いがありました。この思いを受け、南米で日系人が生産した農作物を日本に広める活動を行うギアリンクス社の中田智洋社長と、イサオ・タオカ前駐日パラグアイ大使(日系1世)の発案により、本プロジェクトはスタートしました。なお中田社長は岐阜県でちこり村を運営するサラダコスモ社の社長でもあり、これを契機に現在パラグアイでもやしの試験農場を開設するなど当国の投資環境にも関心を寄せています。

このアイデアに賛同したパラグアイの日本人連合会が中心となり、イグアス農業協同組合の大豆100トンが無償提供され、同連合会のパラグアイ各地での募金活動等による16万米ドルの拠出、また、パラグアイ政府からの10万米ドルの資金提供により、豆腐製造資金が集められました。



(イグアス農業協同組合)

一方、日本では、ギアリンクス社の呼びかけに応えた豆腐生産者の製造協力の下、通常よりも賞味期限の長い「充填豆腐」(常温で2週間保存可能)が2011年4月より生産され、順次被災地や避難所に届けられ、2012年2月末までには、当初の計画どおり100万丁の豆腐が被災地に届けられました。



(被災地に届けられた豆腐)

東日本大震災では他国からも多数の支援が被災地に寄せられましたが、支援国で生産された大豆で作られた豆腐を被災地に届けるといった被災地支援は他国にも例を見ないものであったことから、本プロジェクトは様々なメディアに取り上げられただけでなく、日本の中学校教科書副読本「資料カラー歴史(浜島書店)」において、「日本人移民をはじめ、パラグアイ全国民からの支援のもと、主要生産物となった大豆でつくった豆腐100万丁が被災地に送られました。」と世界から届いた復興支援の一例として紹介されました。

本プロジェクトで生産された豆腐のラベルには、『心はひとつ。パラグアイ国民は日本を応援します。被災地の皆様の一日も早い復興は全パラグアイ国民の願いです。』と書かれ、日本とパラグアイ両国の国旗がデザインされています。日系人に留まらないパラグアイ全国民の日本への思い、また、国内外で本プロジェクト実現に向けて尽力いただいた関係者の皆様の思いが豆腐に凝縮され、地理的な距離を超えて両国間で「心はひとつ」であることが確認できたのではないかと思います。

(肥田剛 大使館 2015年3月)